



西日本プラント工業株式会社勤務の緒統真人(おつづきまさと)氏は、平成17年度外務省ODA民間モニターとして7月23日から7月30日の間パプアニューギニアを訪問した。訪問団(15名)団長として現地を視察した感想やODAに関する問題、又、日本人には馴染みが薄いパプアニューギニアの話等を、今月号と来月号の2回にわたって語っていただく。

1. オー!! ジャパニー

“What is your goal?(目的は)”

“To free our friends(仲間を解放するため)”

「ハイジャック犯と話すなど軽率で危険な行為だった」と、あとで関係者にお叱りを受けた。しかし、これには前段があった。

“アメリカ人はいないか”と犯人らは敵意をあらわに、乗客一人一人のパスポートを取り上げチェックして回った。私の番がきた。アメリカと日本は同盟国である、その敵意は日本人にも向けられ、危険な事態になるのでは。同じ時期同じ中東で起こったハイジャック事件でアメリカ人乗客が殺害され、機外に放り投げ出される映像が脳裏をかすめる。恐怖の瞬間であった。

ところが犯人は差し出したパスポートと私を見て、「オー!! ジャパニー(アラビア語音)」と、親しみを込めて大きな声を上げた。これで、私にも少し気持ちの余裕が生まれた。その後、見

回りにきたこの青年に問いかけたのが冒頭のやりとりだった。

三菱重工勤務時代の88年4月、発電所建設地のあるクウェートに赴任時の出来事である。私が乗ったクウェート航空機はオマーン上空でハイジャックされ、アフガニスタン国境に接するイランのマシャドに燃料補給のため着陸した。この空港で私は事件発生以来45時間の拘束を解かれ解放された。ただ一人の日本人乗客だったこともあり、当時は日本中を騒がせた。このハイジャック犯が、ヘズボラ(Hezbollah/Party of God/急進イスラムシーア派組織)に属していたことは後で知った。

今回、ODA民間モニターに採用されたのを



当時の新聞報道

機に、日本のあるべき国際支援について考える機会を得た。この青年たちをテロに走らせる要因は、そして日本人に親愛の情を示す理由は。

何を今更ではあろうが、十数年も前のことを持ち出した。これは、決して忘れることが出来ない私の体験を語ることで、今から述べるODAの話に少しでも興味をもってもらえれば、との思いからである。

2. ODA民間モニターとは

ODAとは政府開発援助のことで、Official Development Assistanceの頭文字を取ったものである。すなわち、日本政府または政府の実施機関によって開発途上国または国際機関に供与されるもので、開発途上国の経済・社会の発展や福祉の向上に役立てるために行う資金・技術提供による協力のことである。

現在、日本のODAはアメリカに次いで世界第2位の規模にあり、150を超える国と地域に対し実施され、日本の国際社会に対する貢献の重要な柱の一つになっている。その一方でODA事業は、その実施現場のほとんどが開発途上国にあるために、事業の実態や成果、これに携わる関係者の姿が、関係者以外の一般の人間には見えにくいという面がある。

また、日本の援助が援助を受ける国にとって本当に役に立っているのだろうか、援助が感謝されているのか、という声も聞かれる。そこで6年前の平成11年より「ODA民間モニター事業」が発足した。これは日本のODAを支えている国民が、自身の目で海外のODAの現場を直接視察し、その様子を意見や感想として報告するというものである。以来、毎年80名程度のモニターが公募により選ばれ、発展途上各国に派遣されている。(注)1

3. 本年度の派遣

本年度は6カ国に各15名、合計90名のモニターが派遣された。

派遣国は、私が行ったパプアニューギニアの他に、中国、パキスタン、エジプト、セネガル、ベトナムであった。この90名の枠に対し、全国から2,000名に近い応募があった由。数字から見れば難関ではあるものの、最終選考は抽選である。それでもくじ運よく一回で当選の栄誉を得た私ではあったが、さらに、パプアニューギニア派遣団員の総意で団長にも選ばれることになった。これらのことを、「この機会にODAをしっかりと見定めよ」との天声と受け止め、大いに張り切った出発であった。

団員構成は規定により教員5名、社会人10名の合計15名、その半数は女性(7名)となる。わが団の年齢構成は20代前半から60代後半、職業は小・中・高校の先生、会社員、自営業、学生、医師等々多彩な顔ぶれであった。又、財団法人・国際協力推進協会(APIC)から1名、外務省から1名、それに添乗員、専属カメラマンが同行した。

APICはODA民間モニター事業等を外務省から委託されている機関である。今回、当協会から同行して貰ったのは、2年前まで在パプアニューギニア日本大使を務めていた方である。その広い知識・知見により、我々モニターのODA並びにパプアニューギニアに対する理解を大いに高めてもらうことが出来た。

また、専属カメラマンの同行は、ODA民間



成田空港出発ロビーでの結団式で団長挨拶をする筆者(中央)。団員は教師、会社員、自営業、学生、医師等多彩な顔ぶれ。右端は同行の専属カメラマン。

モニターの視察状況を撮影し、ODAの広報活動ツールを作成するためである。今回の映像はミニドキュメントとして編集され、この10月よりテレビで全国放映が開始されている。関心のある方は是非ご覧いただきたい。(注) 2

国連開発計画(UNDP)親善大使で、九州電力のイメージキャラクターでもあった女優の紺野美佐子さんも昨年に引き続きODA民間モニターに参加している。残念ながらわが団ではなく、ベトナム派遣団への参加であった。国民にODAへの理解を求めるために、多岐にわたる活動がなされていることも今回知った。

4. ODA民間モニター応募の動機

ODAに特に関心があったわけではなかった。

たまたま訪れた長崎県庁のロビー内のポスターに目がゆき、掲載のホームページアドレスをメモしていた。これは、ODAという文字に国際貢献という快い響きを感じ取ったからである。それからは片っ端からこのホームページに目を通していった。そこで、意外と私自身もODAと関わってきたことを知った。

三菱重工勤務時代は、主に後進国での発電所建設に携わってきた。そのうちのいくつかは円借款がベースになっていたのである。当時は技術者として物を作ることだけにガムシャラに専念していただけに、このことに心及ぶものではなかった。ただ、その国の人と一緒に汗水たらしながら苦労を共にし、発電所という形を残して帰れる仕事に満足と誇りを感じていた。

その感動を得る基盤であったODAを、別の視点で、すなわち、日本の国際貢献の実態やありかたについて考えてみたいと思ったことが、今回のODAモニター応募の動機である。

5. パプアニューギニアのもつイメージ

世界地図の上で、日本列島をそのまま南に下ろしてゆけば、赤道を超え、オーストラリア大陸の一寸手前で恐竜の形をした島にぶつかる。

これがニューギニア島である。この右半分(東部ニューギニア)がパプアニューギニアなのである。因みに西側に国境を接する部分はインドネシア領ニューギニアとなる。

パプアニューギニアは多くの日本人にとって、馴染みが薄い国である。いまや成田から直行便があり、僅か6時間半で行ける国でありながら、その位置さえおぼろげである。

かつて、パプアニューギニア、いわゆる東部ニューギニアといえば太平洋戦争の大激戦地であり、14万人にも及ぶ命が散ったところである。そして今も尚、そのほとんど多くの屍が、この地のジャングルの中に葬られないまま静かに眠っているのだ。パプアニューギニアを知らないでは、これら戦没者の霊にあまりにも申し訳ない。軍歌「ラバウル小唄」には「さらばラバウルよ、また来るまでは…」と歌われる。このラバウルが位置するニューブリテン島もパプアニューギニアの州のひとつである、といえあある年齢以降の人は感慨をもってうなずくであろう。

パプアニューギニアに対し他にあるイメージには「人食い人種」、「未開の裸族」という猟奇的なものがある。

勿論、今の時代、人食いなどはない。しかしながら、かつて存在していたという説は確かに多い。

「食われるなよ」と冗談まじりで送り出してくれた知人の言葉もあながち的外れではなかったのかもしれない。

また、「未開の裸族」のイメージ



は1964年、朝日新聞に連載された本多勝一氏のルポルタージュ『ニューギニア高地人』によるところが大きい。これが、いわゆる「未開モノ」のブームに火を付け少年マガジンや少年サンデーといった漫画週刊誌のグラビアページにもニューギニア人の写真が登場したこともあった。また、同じ時代、全世界で大きな話題を呼んだイタリア映画『世界残酷物語』にもパプアニューギニアが登場していた。

これらを通じてこの国を知る人も、やはりある年代以降の世代となる。

6. パプアニューギニアの今

それでは、今はどうなのか。日本軍の降伏、大戦終了に伴い国連の信託統治下に、その後1975年に独立を果たし、今年やっとその独立30周年を迎える若い国である。

首都ポートモレスビーには近代的なビルも立ち並ぶ。しかし、島の周りは、世界中のダイバーがあこがれる手付かずのさんご礁に透き通る海。そびえ立つ3千メートル級の山々には世界全品種の3分の2の洋ランが原産するという。また、カラフルな長い尾でバードウォッチャーを魅了する極楽鳥の数々。ニューギニアの魅力は豊かな自然にあり、そのキャッチフレーズは「最後のパラダイス」である。

今回の訪問では、周りの自然にちょっと踏み込んだだけではあったが、それでも、この国のもつ自然の懐の深さを十分に感じる事ができた。

また、「最後のパラダイス」と言わしめるのは、この国の人たちのもつ人間性にもある。とにかく人なつこい人たちなのだ。目を合わせると、必ず手を振って微笑みかけてくる。あまりの親しさに、物をねだる、売りつけるなどの下心を警戒し落ち着かなくなる。だが、その心配は無用。物乞いも皆無である。この点は他の発展途上国とは様相が異なる。

これは部族単位の互助意識が高く、「貧しさゆえの依存は外部からは受けない」というとこ



とにかくひとなつこいパプアニューギニアの人々。目が合うと、大人も子供も向こうから手を振って微笑みかけてくる。

ろにあるようだ。何しろ700以上にも及ぶ部族が存在し、それぞれが異なる言葉を持ち、寄り添って生きている。同じ言葉を話す共同体の単位が「ワントーク」であり、基本的にはこれらの集合体がこの国を形成する。

また、忘れてはならないのは、パプアニューギニア国民の対日感情が非常に良好であることだ。先の大戦中は18万人もの日本軍将兵がこの国に駐留し、オーストラリア等の連合軍と戦闘を交えた。それにもかかわらず、この国の人には当時の日本人に対する敵意はみられず、むしろ親日的な心情があるという。「白人は我々を奴隷として扱った。日本人はマスター（主人、隊長）自らが鋤を振った」とは、当時を知る現地人の多くが言う言葉の由。日本人としては救われる気持ちになると同時に、こういう国の人たちの為に何かしてあげなければと思うのが人の情でもある。

7. パプアニューギニアの基本情報

さて、以上、一寸私観を交えたパプアニューギニアの紹介ではあった。これに加え、この国を知るためのデータを次に列記しておく。これらを踏まえて、次号に、モニターとしての訪問結果や感想等を述べて行きたいと思う。

* 国土面積は日本の1.25倍(46万平方キロ)

* 人口は570万人で人種はメラネシア人

- * 英語が公用語で広く通じる
- * キリスト教徒が多数(伝統信仰も根強い)
- * 19世紀後半のヨーロッパ人來訪により原始時代生活から目覚め以降独, 英, 豪州, 日本等による統治。1975年独立
- * 英国女王を元首とする立憲君主制(英国, 豪州との関係が深い故同制度)
- * 主要産業は鉱業(金, 原油, 銅), 農業(パーム油, コーヒー), 林業等の一次製品
- * 自給自足経済と貨幣経済が混在する二重経済構造
- * 一人当たりGNIは約500米ドル
- * 豪州は輸出入共に50%内外を占める最大の外交関係国であり, 一番の経済援助国
- * 日本は銅鉱石, 木材, 魚介類を輸入し, トラック, タイヤ, 乗用車, 機械類を輸出
- * 在留邦人は190名(2004年)



パプアニューギニア国旗

パプアニューギニアのシンボルである極楽鳥と南十字星。
ラストパラダイス(最後の樂園)の雰囲気国旗にも読み取れる。



おつuki まさと
緒続真人氏紹介

昭和21年4月生。長崎県出身。平成14年三菱重工業株式会社を退職後西日本プラント工業に入社, 長崎営業所長として勤務し現在に至る。専門は火力プラント現地建設・試運転。
三菱重工時代には中近東, 東南アジアを中心に海外での業務経験豊富。勤務の傍ら長崎平和推進協会「平和案内人」としてボランティアでも活動中。

(注)1: ODA民間モニターについては外務省ホームページ(<http://www.mofa.go.jp/>)をご参照ください。(緒続さん他のモニター視察報告書も収録)

(注)2: 「世界と共に生きる」

BSジャパン(デジタルBS放送)

毎週木曜20時55分~21時00分

(パプアニューギニア編は11月に放映)

